

ポランニーの「社会主義」の起源：
「自由社会主義」と「キリスト教社会主義」

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 大阪市立大学経済学会 公開日: 2017-03-28 キーワード (Ja): カール・ポランニー, ブダペスト, 自由社会主義, 非マルクス主義的社会主義, キリスト教社会主義, オーウェンの社会主義, 産業社会における良き生活 キーワード (En): 作成者: 若森, みどり メールアドレス: 所属: 大阪市立大学
URL	https://ocu-omu.repo.nii.ac.jp/records/2001659

ポランニーの「社会主義」の起源 ——「自由社会主義」と「キリスト教社会主義」——¹⁾

若 森 み どり²⁾

目次

1. ポランニー研究の新たな展開 —— ハンガリー時代のポランニー像の究明
2. 「偉大な世代」たちの苦悩 —— ハンガリーの「後進性」との闘い
3. ポランニーの「社会主義」の起源 —— 非正統派的キリスト教観と自由社会主義
4. 変貌するウィーンでの思想形成 —— キリスト教とマルクス主義との「対話」
5. 『大転換』以降 —— オーウェンの社会主義から産業社会における良き生活へ
おわりに

キーワード：カール・ポランニー，ブダペスト，自由社会主義，非マルクス主義的社会主義，
キリスト教社会主義，オーウェンの社会主義，産業社会における良き生活

-
- 1) 本稿は、本稿は、科学研究費助成金基盤研究(C)「国際経済秩序と平和に関するカール・ポランニーの制度主義的アプローチの展開」（研究課題番号 16K03577）の研究成果の一部である。このテーマは、社会思想史学会 2013 年 10 月（於 関西学院大学）のセッション「ポストマルクス主義」（世話人 太田仁樹氏）での報告「ポランニーにおけるキリスト教・マルクス主義・社会主義」を、とりわけ G. デールによる近年のポランニー研究の成果（Dale2016a;2016b）を吸収して展開させたものである。
 - 2) 大阪市立大学経済学研究科・経済学部所属（wakamori@econ.osaka-cu.ac.jp）。学部 2 年生の時、海老塚明先生が熱く語られた「制度の経済学」にすっかり魅了された。近代経済学とマルクス経済学に二分された経済学のなかで埋もれた重要なテーマを、東西冷戦後の新たな政治経済学として学生に講義される先生の姿勢に心を動かされた。2015 年の 10 月から本学で政治経済学を担当することになった筆者は、当時の先生の姿を思い起こしながら、21 世紀の政治経済学に相応しい内容を学生に伝えることができるよう、努力していきたいと思う。また、カール・ポランニーを中心とした経済学説・思想史研究に取り組んできた筆者は、アンドリュース・E・バーシェイの『近代日本の社会科学』（山田鋭夫訳、NTT 出版、2007 年）に触発されて、日本の経済思想史研究にも従事したいと考えるようになったが、同書のあとがきの謝辞に大島先生の名前を見つけた際に感銘を受けた。本学で学んだ学生のひとりとして、ひとりの学史研究者として、また、本学に貢献された先生方の後輩のひとりとして、大島真理夫先生と海老塚明先生に心より感謝を申し上げる次第である。

1. ポランニー研究の新たな展開——ハンガリー時代のポランニー像の究明

カール・ポランニー（Karl Polanyi: 1886～1964）の主著『大転換——われわれの時代の政治的・経済的起源』（初版 1944）は、二つの世界大戦，ロシア革命やハンガリー革命，世界大恐慌と国際金融秩序（金本位制）の崩壊，台頭する各国のナショナリズムや欧州を跋扈するファシズム，ニュー・ディールや福祉国家，そして，東西冷戦と核の脅威といった激動の 20 世紀の展開を，19 世紀市場社会の解体に伴う政治的・経済的・社会的な大変動の原因から分析した，名著である。

ポランニーは，オーストリア＝ハンガリー二重帝国末期のウィーンで中流のユダヤ人家庭に生まれ，幼少期以降の約 30 年間をブダペストで過ごした。世紀転換期のブダペストにおけるユダヤ系進歩派知識人のサークルに属した青年期のポランニーは，そこで出会った O. ヤーシの思想的な影響を受けて，ハプスブルク特権階級に対する「対抗文化（counter-culture）」，とりわけ残存する「封建制度」を民主化するための諸活動に深く関与した。彼は共産主義ではなく，「急進市民党」を支援していた。

第一次世界大戦が彼とハンガリーの運命を大きく変える。従軍し致命的な負傷を受けて帰国したポランニーは入院生活を余儀なくされるが，敗戦と同時に独立したハンガリーでは，戦後処理を担ったカーロイ・ミハイを党首とする急進市民党政権が半年も経たないうちに，（ロシア革命影響下の）タナーチ革命による共産主義政権にとって代わられた。その後，クーデターによって反動的なホルティ政権が誕生して，反革命とテロルが繰り返され，ハンガリーは長らく政治的な混乱が続く。急進市民党を支えたポランニーは，ヤーシと共に，1919 年 6 月，オーストリアへ亡命する。

ポランニーは約 15 年間にわたってウィーンで最初の亡命生活を送ることになる。ヤーシは 1920 年代前半にアメリカに移住し，自由と民主主義の政治学者として活躍する道を選ぶが，それまでの数年間，二人は『ウィーン・ハンガリー新聞』を発行し，政治的な発信を続けた。ヤーシ渡米後のポランニーは，『オーストリア・エコノミスト』誌の編集職に就き，欧州の政治的・経済的動向，とりわけ，イギリスの自由主義的社会改革やヴェルサイユ体制下の通貨問題や列強諸国のドイツ外交政策やイタリア・ファシズム，そしてアメリカのニュー・ディールなどの広範な政治・経済問題を取り上げ，記事を書いている。また，ウィーンでポランニーは，「キリスト教社会主義者」との交流を深め，自らもキリスト教社会主義の立場に立つ社会学者として，その後の研究・教育生活を通じて社会改革の実践に関わっていく。

2016 年に刊行された新しいポランニー論文集『カール・ポランニー——ハンガリー時代論集』（Polanyi 2016）を編集したイギリスのポランニー研究者 G. デールによれば，ポランニーの思想の根幹にある「社会主義」や「自由」を理解するには，K. ポランニー＝レヴィットや

C. トマスベルガーや M. カンジャーニが中心となって解明してきた「ウィーンのパランニー」像 (Polanyi 2002; 2003; 2005) よりもさらにさかのぼり、ポランニーが壮年期の 30 代前半まで過ごしたブダペストでの思想形成を検討する必要がある (Dale 2010; 2016a; 2016b; 2016c)。オーストリア・ファシズムの抬頭によってイギリスでの二度目の亡命生活を余儀なくされたポランニーは、1934 年に知人に宛てた手紙のなかで、「私のすべての刊行物は 15 年にわたるウィーンでの亡命生活において書かれたものですが、1919 年まで〔約 30 年を；引用者補足〕過ごしたハンガリーでの文学と教育に関する仕事が、私の人生と思想の真の背景を成しています」と書いている (Dale 2016a: 1, 29)。

『大転換』の形成史としてのウィーン、およびイギリスでのポランニーの思想形成については 21 世紀になって解明されてきたが、ハンガリーでの思想形成に関する研究は空白部分であった。近年のデールによるポランニー研究は急速にその空白部分を追究している。とりわけカギとなるのは、「自由社会主義 (liberal socialism)」と、個人 (人格) の自由と社会に関するポランニー独自のキリスト教観に基づく「キリスト教社会主義」である。

ウィーンでの亡命生活の初頭に、ポランニーは社会民主主義系団体の機関誌『新たな大地』に「今、何を求められているか：一つの応答」(ポランニー 2015a/1919) を寄稿し、そこで「私は、かつて一度たりとも共産主義者だったことはない。〔中略〕さらにハンガリーでは、すでに長いあいだ反マルクス主義的立場の代表者として扱われてきた」と述べている。そして、自らの支持する「自由で重農主義的な経済思想としての自由社会主義」について説明し、(国家から強制されるのではない) 自発的な協同組合^{ディッセンシャフト}、とりわけ農業の協同組合の重要性について、主張している (同上：315-316, 324-326)。協同組合が「自由と共同労働と自由な交換が共に行われるところでのみ存続可能である」と考えるポランニーは、「自由社会主義と共産主義が相容れないという事実」を強調する (同上：333)。自由社会主義のような「体制の社会においては、自由な協働が共同労働の一般の形態となる。有機的な協同組合の有機的構造の内部では、消費・生産組織が市場そのものを編成〔する〕。〔中略〕この社会の成員交際範囲のなかで、自身が占める位置を見通すことができる。さらに〔中略〕生き生きとした体験から、利己的な経済的衝動と並んで利他的な協働意欲が湧き、これらの誘因を常にあらためつつ、個々の人格を全面的に保ったままですれらを維持し育むことが可能となる」(同上：320-321)。

ウィーンでの亡命生活以降、ポランニーは自らを「キリスト教社会主義者」としてその立場を表明し、「機能的民主主義」・「見通し」・「社会的自由」という独自の自由観を形成していく。また、主著『大転換』においても、「オーウェンの社会主義」など独自の「社会主義」概念を用いている。これらすべての著作において、現実の社会における人間の自由と共同体の制限、および可能性という問題が貫通している。個別のテキストにおける用語の検討が、これまでの研究によっても明らかにされた。だが、その起源の解明という点においては、30 代前半の齢まで過ごしたハンガリーでのポランニーの思想形成——「自由社会主義」やその独自のキリス

ト教——の解明は始まったばかりである。

2. 「偉大な世代」たちの苦悩——ハンガリーの「後進性」との闘い

ポランニーによれば、「ある世代がその世代の使命（calling）を自覚するとき、一つの世代が歴史のなかに誕生する」（Polanyi 2016a/1918:64）。19世紀半ばに生まれたポランニーの両親は、「自由なブルジョワジー」の精神を反映した「楽観主義的」で「幸福な世代（happy generation）」と表現される。というのも、その世代をハンガリーで過ごした人びとは、19世紀後半の経済的繁栄と人口増加を経験しており、科学と人間の知識の進歩が諸国民の幸福や安寧と国際平和に貢献することに対する揺るぎない確信を持った世代であったからである。その世代とポランニーら子供たちの世代との間には、埋めがたい「隔絶」があった（Dale 2016b: 1-2）。ポランニーは、弟マイケルや友人の G. ルカーチ、K. マンハイム、ヤーシらと同様に、自らの時代の経済的、政治的、精神的危機の診断に捧げた世代であり、彼らは「偉大な世代（great generation）」と呼ばれる。

「偉大な世代」に共通する特徴は、自らの世代の「使命」として、ハンガリーの「後進性」の克服を位置づけていたことである。偉大な世代によれば、西欧でありながら西欧文明の「周縁」、あるいは「外部」にとどめ置かれているハンガリーは、「進んだ」西欧から取り残され遅れており、さまざまな後進性——封建制の遺産など——に苦しんでいる。ブダペストから鉄道で数時間の距離にある帝国の首都ウィーンに、西欧の自然科学、社会科学、文学、芸術、建築、そして自由と民主主義の政治の精神的な躍動が開花していたが、そのようなウィーンとは異なり、もうひとつの帝国のハブ都市であるブダペストでは、ブダやアンドラシー大通りなど一部を除いた多くの地域——たとえば南部のキスペスト地区——で、工場地帯とスラムがひしめいていたのである。

ポランニーたちはこうした二重帝国末期の「ハプスブルクのジレンマ」に苦しんだ世代であり、西欧文化の先進性を積極的に吸収することでハンガリーの後進性を打開しようと試みる諸活動に、それぞれ身を投じた（Dale 2016b:3）。1900年代後半の時期から第一次世界大戦前にかけて興隆した「対抗文化」と呼ばれる、ハンガリーの知的復興のための社会運動に関わりながら青年期を過ごしたポランニーは、「自由社会主義」として知られていたブダペストの政治的潮流に合流した。自由社会主義は、ルカーチやベーラの共産主義の立場と区別される。自由社会主義者は「非マルクス主義的社会主義者」として特徴づけられ、ヤーシ、マンハイム、そしてポランニー兄弟が分類される（Congdon 1991:214-233）。

しかし、偉大な世代のハンガリーでの活動は第一次世界大戦後のホルティによる反革命（白色テロル）以降に完全に断たれ、彼らはそれぞれ亡命知識人として生きることになった。ルカーチとヤーシは、カール・ポランニーと同じくオーストリアに亡命した。他方、弟マイケルとマ

ンハイムはドイツに亡命した。その後まもなくルカーチはソヴィエトに亡命し、「共産主義者・マルクス主義者」としてハンガリーに戻る。すでに言及したように、ヤーシは1920年代前半には早くもウィーンからアメリカに渡り、東欧の共産主義を批判的に考察し英語で発信する、自由論と民主主義論の著名な研究者となった (Litván 2006)³⁾。

イギリス亡命後の弟マイケルは、「自由資本主義」(liberal capitalism)を「漸進的に進化し続ける、信頼に値する機能する社会的伝統として証明されたもの」と考えるようになり、自由資本主義に関する「バーク的な擁護を前進させた」(Dale 2016b:5)。そして、兄カールの思想的ライバルであるミーゼスの系譜を引き、経済的自由主義者の論客で後にモンペルラン協会の創設者となるハイエクと急接近して交流を深めた。マイケルは、自由主義の思想的・政治的な再建——戦間期の新自由主義の創生——に関わる立場から思索と活動を展開するキーパーソンとなり、兄カールとは思想的・政治的には決別する。カール・ポランニーにとって、20世紀の最初の数十年における「自由主義的資本主義秩序(市場経済を基盤とした市場社会)」の崩壊と、それが普通の人びとの暮らしに与えた破壊的な影響、そしてそれらに付随して生じた自由と民主主義と平和の同時消失という衝撃的な経験を省察し解明する課題が、そのライフ・ワークの基盤となる。

以下では、ユダヤ系のルーツを持ちつつも、キリスト教徒として、かつ社会主義者として——キリスト教左派の立場に立って——、経済的自由主義とファシズムと対峙し続けたポランニーの思想の核心部分について取り上げていく。とりわけ、生涯にわたって「自由社会主義(liberal socialism)」あるいは「非マルクス主義的社会主義(non-Marxist socialism)」の立場から、経済的自由主義者と対抗し続けた彼の思想を特徴づける「倫理的基礎」について、近年のポランニー研究に依拠しつつ掘り下げて論じたい。

3. ポランニーの「社会主義」の起源——非正統派的キリスト教観と自由社会主義

3-1. ユダヤ人的ではないユダヤ的なもの、および、非正統派的キリスト教観

デールの近年の研究によれば、ポランニーの思想的ルーツの根源には、彼の出自に由来する「マジャーリ的なものとユダヤ的なものの混合」が見られる。ポランニー兄弟は、父 M. ポラチュクによる「ハンガリーでのユダヤ人差別や迫害から逃れて生き延びられるように」という配慮から、ユダヤ教からキリスト教に改宗させられ、名前も欧州風に表記するようになった。

3) 1920年代半ばに渡米したヤーシは、ヨーロッパのファシズムを直接的に経験することなく、ポランニーとの交流は途絶える。彼らが交流を再開するのは、1950年代においてである。Polanyi (2016) には、ヤーシとポランニーの書簡が収録されている。

父の教育方針によってポランニーは、ユダヤ系ではありながら、ユダヤ人のコミュニティーの中心から離れたアウトサイダーとして生きることを余儀なくされたのだが、改宗したキリスト教についても、ポランニーはその正統派の教義から大きく距離を置くようになる (Dale 2016b: 40)。

近年のポランニー研究は、彼のキリスト教理解が正統派的教義からかけ離れたもので、彼固有の非正統派的なキリスト教理解に基づいていたこと、そしてその独自の非正統派的なキリスト教観と彼の社会主義観とが結びついていること、を解明しつつある。「イエスの復活」(1923)と題した論考のなかでポランニーは、「イエスの肉体の復活の奇蹟は、後にキリスト教の教義となったが、しかしそれでもイエスの精神の復活を邪魔することはできなかった」と述べ、イエスの精神の本質的で現代的な継承という使命を、既存の教会に託すことはできない、と主張している (Polanyi 2016b:79-80)。

青年期のポランニーにとって、ハンガリーの正統派のキリスト教は保守的で反動的な勢力に加担しているとして批判すべき対象となった。とりわけ、ポランニーが1911-13年頃に関心を持っていたテーマは、当時、ハンガリーで「宗教倫理」と呼ばれていた「キリスト教保守派の信仰体系」の問題であった (Dale 2010)。聖職者でポランニー研究者のビショップは、いち早くこの点に着目し、ハンガリー時代から一貫するポランニーの思想的特徴を次のように要約している。

「ポランニーはむろん同時代のキリスト教会のことを知っていたが、信頼していなかった。ポランニーのキリスト教は、聖書、ドストエフスキー、トルストイ、グラント夫妻のようなイギリスのキリスト教社会主義の生き証人、オットー・パウアー、オイゲン・ベネディクトなどの労働者階級のオーストリア・キリスト教に根源を持っていた。また、もちろんポランニーは、同時代の社会主義的な政治運動を知ってはいたが、彼は、第二インターナショナルの経済決定論のような、狭いイデオロギー的教義に自らの心を従わせることを拒絶した。ポランニーの社会主義は、ロバート・オーウェン、マルクス、そして歴史的危機についての深い分析のなかに、その根源を有するものだった」 (Bishop 1994)。

英語教育を筆頭に、幼少期から啓蒙された自由主義的な西欧文化を徹底的に吸収し、青年期にギムナジウムに通ったポランニーは、マンハイムやルカーチらとともに、ハプスブルク帝国時代の「心理地理学」の表現でいうところの「ブダペスト知識人の下位階級」の知的コミュニティーに属していた。ポランニー自身が組織した「ガリレイ・サークル」もここに属しており、サークルの構成員の比重はユダヤ人およびユダヤ系に偏っていた。こうした知的コミュニティーの特徴について、「ユダヤ人的ではないユダヤ的なもの (non-Jewish Jew)」とデールは表現している (Dale 2016b:3)。「ユダヤ人的ではないユダヤ的なもの」とはどういった意味で

あろうか。デールは、ブダペストのボランニーや彼の周辺に位置する知人や知識人たちの特徴を、次のように捉えている。

「彼ら／彼女らは東欧人として、『西欧的諸発展のいくぶん外部に置かれている』と感じていた。その多くはユダヤ人として『内向的でいっそう反ユダヤ的な機運を高めていく国民共同体 (national community)』から排除されていた。世紀転換期のハンガリーという容赦のない砂利混じりの土地で自らの『本物のルーツ』を見つけることができないことが、[中略] 絶えず彼ら／彼女らから逃げていくように思われたゲマインシャフトの可能性への郷愁を駆り立てたのである」(同上:3)。

普通選挙権の獲得を求めるゼネストに対する保守派による弾圧事件——「血の木曜日」(1912年5月23日)を契機に、ボランニーは積極的な政治生活に入ることを自らの使命として自覚し、自由社会主義者の指導的地位にあったヤーシの影響を受けつつ、ガリレイ・サークルの活動や機関誌『自由思想』の発行に尽力していく (Congdon 1976:174)。

自身が発表した論文「信仰と欺かれやすいこと」(『自由思想』1911年9月)において彼は、当時のハンガリーのキリスト教権威を代表する「宗教倫理」が「私たちの行為の私たち自身の道徳的な責任」を弱めることで「道徳性を掘り崩している」、という批判を展開した。ここでボランニーは、「責任を受け容れることが真の信仰の本質を形成する」、と主張している (Congdon 1976)⁴⁾。この論文を書いたときボランニーは20代半ばであったが、ここに見られる「真の信仰」についての彼の考え方は、その約15年後にウィーンで執筆された草稿「自由について」(1927)で展開された、「責任を通しての自由」という概念を想起させる。市場社会が人間の自由を否定しているとする彼の考えは、その「真の信仰の本質」に関する考え方にも通じている。「自由について」でボランニーは、市場社会では人間の選択や行為が他者に与える強制的な影響力が見えないために自由が奪われている、という市場社会における人間の不自由の問題を提起した (若森 2011, ボランニー 2012a)

デールの斬新な解釈によれば、ボランニーの一風変わったキリスト教観の核心には、アリストテレスに象徴される古代ギリシア的人間観 (ポリスという政治共同体とそこにおける市民) がある。ボランニーは、「神との交わりにおいて生き、ポリスの生活に適応する市民としての古代ギリシア的人間観のプリズムを通して、キリスト教を理解した」(Dale 2010:9) のである。

ボランニーの自由社会主義は、道徳的な共同体のなかで創出されていく人間の諸能力を重視するものだった。ポリスという共同体の「市民」というアリストテレス的な人間観が、ボラン

4) 「責任を受け容れることが信仰の本質を形成する」というボランニーの見解を、これまでの多くのボランニー研究者は、「トルストイ的なキリスト教理解」と特徴づけてきた (Nagy 1994, Bishop 2006)。

ニーの社会主義的な人間観の基礎になっているのである。アリストテレス的な人間の概念は、道徳的な責任を問われる個人的人格であり、共同体との関わりのなかで良き生活を追求する自由な主体を想定する。神との交わりを介したキリスト教的な共同体の実現に向けて地上の社会を近づけていく、あるいは地上の社会において共同体を組織する努力を続ける、というのがポランニーのキリスト教観である。デールはこのようなポランニーのキリスト教観を「原始キリスト教」に分類する。ポランニーは、ハンガリー時代以降も、基本的にはこの立場を保持して、自らの社会主義認識を深めていくことになる。

デールによれば、ポランニーの思想形成のなかで「キリスト教のテーマは、その比重は時期によって変化しているものの、彼の生涯を通して大いに作用した。基本的にアリストテレス的であるポランニーの人間の概念は、目的論的な方向性を失わなかった。アリストテレスとマルクスを通して、ポランニーは社会的創造物としての人間を定義した。労働を介した自然とのあいだの相互作用として人間の社会性が進化するとマルクスが見なしたのに対し、ポランニーは道徳的な共同体の創出、すなわち宗教的な神性のなかで最も高い形態を達成してゆく人間の能力という局面を、より重視したのである」(同上：9)。

ポランニーは、既存のキリスト教の教義以外のものを認めない非寛容で権威主義的なキリスト教会という既存の組織のなかに、キリスト教の本質を求めなかった。彼にとって「キリスト教の重要な機能」とは、「個人的人格と社会性とを統合する」ところに求められる。ポランニーの考える真のキリスト教の機能は、さまざまな社会の矛盾や世界の軋轢を修復し調整し統合する機能において発揮される。キリスト教は、キリスト教徒に対して自由・寛容・責任を要請すし、個人の責任と集団生活に対する責任とを統合する課題を、キリスト教徒に求める。

デールは、このようなキリスト教観に基づいた自由社会主義者のポランニーを、共同体主義者（あるいは社会主義者）と把握するよりも、「多様な諸要素を統合する思想家と捉える方がより正確に把握できるだろう」、と述べている⁵⁾。ポランニーは自ら進んで、一見、個人への責任と共同体への責任に引き裂かれるように見える、あるいは、個人の人格的統合に固執する教義と集団生活を維持し発展させる義務の要請への分裂か二者択一かに見える、当時の政治哲学内部の支配的な創造的緊張の源泉であった「自由主義と共同体主義（および社会主義）の矛盾」の「巻き添え」となり、その統合の諸形式を社会科学者として追究した。この「巻き添え」こそ、ポランニーの思索の特徴となり、絶えざる原動力を与えたものである。重要なことは、ハンガリー時代以降のポランニーが、「共同体の探求」について「自由に思考するヒューマニスト」として活動していた、という点である。ポランニーの自由社会主義とは、言い換えれば、

5) ポランニーのキリスト教観の特徴は、1920年代初期にウィーンで書かれた「初期キリスト教と共産主義」Polanyi (1920s) “Early Christianity and Communism” (ハンガリー語) において顕著である (Dale 2010)。

「道徳的な責任を問われる諸人格から成る共同体の創出へと向かう運動」である。同じことを表現する際に、たびたびボランニーは、「テンニースの『ゲマインシャフトからゲゼルシャフト』への転換に貢献する運動」と表現してもいる（同上：9）。

「ゲマインシャフトの思想家として語られることの多い」ボランニーが、ハンガリー時代に形成した倫理的な基礎は、ユダヤ人的ではないユダヤ的なものと、東欧的、マジャールのなもの、非正統派的なキリスト教観との混合、および、非マルクス主義的な自由社会主義から構成されており、その思想的な基盤は複雑で、異端的で周縁的な要素を含め、多種多様な要素から成っている。

3-2. 自由社会主義、非マルクス主義的社会主義、ゲマインシャフトの思想

ギムナジウムに通っていた1902-07年にボランニーは、兄アドルフと従兄弟オドン・ポールの組織した社会民主党系の学生組織に入り、そこでマルクス主義に出会う。しかし、その「唯物論的な歴史概念」を「決定論的で自らの道徳的な考えや信仰と矛盾する」と感じたボランニーは、マルクス主義から遠ざかり、自由社会主義へと向かう。Congdonによれば、自由社会主義の特徴は、「唯物主義的経済決定論を拒絶し、人間の意識改革の創造性を強調する」ところにあった（Congdon 1976; 1991）。

自由社会主義の主要な課題は、偏狭なマルクス主義の唯物主義的経済決定論を乗り越えること、および、宗教的・人種的・階級的諸偏見と闘うことであった。自由社会主義は「対抗文化」の重要な担い手となり、西欧の科学的な世界観をブダペストに紹介し普及させ、ハンガリーの知的復興のための拠点の組織化に力を注いだ。

ボランニーが組織し初代委員長となったガリレイ・サークルもその活動の一環である。それが「ユダヤ人的ではないユダヤ的なもの」の特徴を帯びていたことは先に述べたとおりであるが、ハンガリー時代のボランニーは、自由社会主義運動の実践に取り組み、ヤーシの助言を受けつつ、イギリスのフェビアン主義者や、E. ベルンシュタインのような修正主義的マルクス主義者、F. オッペンハイマーや W. ゾンバルトのようなドイツの歴史社会学者、ハンガリーでは進歩的な法学者 G. ピクレル、オーストリアの精神分析で著名な A. アドラーなどを講師として招聘して講義を提供したり、読書会を開催したり、若手研究者の研究発表の場を提供したりする諸活動を続けた。また、自由社会主義の若い研究者や活動家が発信するための機関誌『自由思想』の発刊と編集作業に関わり、自らも多くの論文を投稿した（Congdon 1976; 1991, Dale 2010）。

ボランニー研究者のデールは、ハンガリー時代と1919年6月以降のウィーン時代のボランニーの思想的立場についても、「自由社会主義」と特徴づけている（Dale 2010）。デールは、ボランニーの決定論的なマルクス主義に対する拒絶と、彼固有の非正統派的なキリスト教観とが結びついたものとして、ボランニーの「自由社会主義」を把握している。

「人間の進歩の可能性は、現代における共同体の創出という課題に結びついている」というポランニーの考え方は、第一次世界大戦後においても不変であった。ポランニーは廃刊に追い込まれ最終号となった1919年1月の『自由思想』で、「1914年8月4日は永遠に自動的な進歩への盲目的信頼を打ち砕いた」と書いている。ポランニーによれば、ヨーロッパの人びとを戦争に駆り立てたのは非人格的な力ではなく、人びとの精神的で道徳的な混乱と墮落であった。しかし、ボルシェビズムが復活させたマルクス主義の歴史的唯物論は、「労働者は単に資本主義を攻撃するだけであり、政治は競争的な利害間の闘技場であり、戦争は商業的な競争の結果に過ぎない」と解釈する。Congdonによれば、第一次世界大戦とボルシェビズムの経験を通してポランニーは、「20世紀の人間にとっての中心的な問題、すなわち現代人の運命がかかっている争点は、決定論と自由な道徳的な意志の中間にある」と確信した（Congdon 1976: 177-178）。それは、自由社会主義者としてのポランニーの立場と一致している。

ポランニーから見れば、決定論的なマルクス主義や共産主義には、ゲマインシャフトの思想も人間の自由の理想も欠落していた。ポランニーの支持する自由社会主義は、彼自身がブダペストで感じ経験したように、西洋の周縁や異端の立場に立つ多様な人びとの自由な思索や挑戦を認めるような、宗教的な寛容や政治的な寛容——市民的諸自由——を要請する。自由社会主義は、市民が良く生きることに関する政府の義務や課題をも要請する。また市民には、権利に応じた、共同体への義務を求める。近現代社会では、義務からの免除という意味での自由観が支配的であるが、現代における共同体の創出という自由社会主義の課題においては、義務への自由について考察する必要がある。「義務への自由」、あるいは「責任への自由」は、自由資本主義が否定する自由観である。ポランニーは、こうしたテーマをウィーン時代以降に発展させていく。その過程で彼は、市場社会の限界を乗り越えてゆくような自由と民主主義の成熟——ポランニー＝レヴィットの表現でいえば、その担い手としての「すべての人びと」（特権的なエリートだけではない）が「良く生きること」——を、現代社会の根本的な課題として認識することになる（ポランニー＝レヴィット 2015:18-19）⁶⁾。

ハンガリー時代に形成されたポランニーの思想——非正統派的なキリスト教観と非マルクス主義的社会主義的な性質を持つ自由社会主義——は、主著『大転換』や遺稿集である『人間の経済』、あるいはさまざまな諸論考で登場する、アリストテレス、R. オーウェン、K. マルクス、G. D. H. コール、F. テンニースといった一見バラバラで無関係に見える思想家の集合が、なぜポランニーの思想のなかで結びついているのかに関する、重要な論拠を示している。デールが着手したハンガリー時代のポランニー像の本格的な解明作業を彼のその後の思想展開

6) ポランニーは1950年代においても、この問題を追究していた。最晩年のポランニーは、「産業社会において良く生きる」というテーマを希求していた。産業文明の時代以降の複雑な産業社会のなかで人間が道徳的な共同体を創出するという課題は、ハンガリー時代から最晩年の北アメリカ時代において一貫していたのである。ポランニー＝レヴィット 2015 参照。

と関連づける研究の進展が、今後期待されるだろう。

4. 変貌するウィーンでの思想形成——キリスト教とマルクス主義との「対話」

1918年の選挙で勝利した社会民主労働者党が前例にない規模で、労働者のための社会的住宅の建設や市民大学・病院の設立、労働条件の改善に力を入れて、ウィーンの抜本的な地方自治改革に取り組んでいた「赤いウィーン」と呼ばれる市政は、ハンガリーから亡命後のポランニーの思想形成に決定的影響を与えた。というのも、その後のポランニーにとって、社会主義の「基準」は、この時期のウィーンの社会主義市政となっていくからである。

ウィーンの社会主義市政の政策立案に関わった「オーストロ・マルクス主義」者たちは、ソヴィエトやハンガリーの共産主義者やドイツのマルクス主義者とは異なり、「非決定論的な社会主義」の精神に基づいて、住宅、食糧、教育、医療、労働に関わる包括的な社会政策の課題に次々と取り組んでいた。このウィーン市政の姿勢は、ヴェルサイユ体制下のあらゆる国々が課されていた「緊縮財政」という「掟」を破るものであり、「赤いウィーン」は「先取りした福祉国家」のような「社会主義」であった。さらに、この社会主義市政においては民主主義が形式的のみならず、実質的にも機能していた。赤いウィーンの民主主義と社会主義とは分かちがたく結びつき、経済の暴走を社会に埋め込む実験が、社会政策の充実やそのための財政改革を通して繰り返られていた⁷⁾。

また、ポランニーは、ウィーン社会主義市政の政策立案者の主要な人物の一人であったO. ノイラートや、赤いウィーンを強烈に批判する経済的自由主義者ミーゼスの論文や論考から大きな刺激を受ける⁸⁾。シュンペーターなど経済学者が集うウィーンで最先端の社会科学を学び、また、ハンガリー時代には遠ざかっていたマルクスを学び直す機会を得た。シュンペーターは第一次世界大戦後に『租税国家の危機』を執筆しているが、これは赤いウィーンで支配的であった財政社会学を批判的に意識して書かれたものである。ポランニーはウィーンで、C. メンガー、F. ヴィーザー、E. ベーム＝バベルク、シュンペーターといったオーストリア経済学者たちの著作や、G. シュモラーやW. ゾンバルトなどの歴史学派やM. ヴェーバーの著作、メンガーとシュモラーの方法論争、O. バウアーやM. アドラーといったオーストロ・マルクス主義者の著述、さらにマルクスの『資本論』や初期著作を集中的に研究した。ハンガリー時代よりもいっそうイギリスのギルド社会主義の熱心な支持者になったポランニーは、それを「倫理的な学説」として受け止め、1923年に弟マイケルに宛てた手紙のなかでは、「社会的な

7) 後にイギリスに亡命してからも、ポランニーにとって理想の民主主義の実践は依然として赤いウィーンであった。この観点は、『大転換』第7章の巻末脚注において述べられている。

8) 「赤いウィーン」のノイラートについては桑田 2014、小林 2010 を参照。

破局」が進行している現代では、「キリスト教を体現するギルド的な生活によって新しい社会が可能となる」と表現している (Congdon 1991:220-221)。

ポランニーは、イギリス社会主義者として著名な G. D. H. コールの『労働の世界』(1915)と『ギルド社会主義再論』(1920)に関する理解を深め、中央集権的ではない社会主義像を模索した。「機能的民主主義 (functional democracy)」は、コールの機能的社會理論に着想を得たポランニーが見出した、市場社会に代わる新しい社会の基本原則である。「機能的」という用語は、諸個人に共通の努力と協力を「本来の共同体」(労働組合、協同組合、地方自治体、文化団体など)のレベルで要求する諸機能(生産する、消費する、居住するなど)に基づいて社会を組織化する、という意味で使われている。ポランニーのいう機能的民主主義とは、機能に応じて自主的に組織された複数のアソシエーション(機能的組織)の意思決定と運営とに諸個人が参加することを原則として、アソシエーション間の交渉によって、生産と消費との対立や公共交通などの都市インフラの整備と私的消費との対立などを「調整する」ことに基礎を置く参加型民主主義、を意味していた。コールを継承したポランニーの社会主義の立場は、赤いウィーンを支持し、オーストロ・マルクス主義に寄り添う立場であった。

1910年代後半から20年代前半にかけて最盛期を迎えたピークに達した社会民主主義市政下の赤いウィーンを舞台に一流の経済学者たちが参加した、「社会主義経済計算論争」にポランニーも関わった。彼は、赤いウィーンを真っ向から批判するミーゼスを批判する論文を執筆し、著名な学術雑誌『社会科学・社会政策雑誌』(1922)に掲載している。この論文掲載という学術的な成功以降、「社会主義における非マルクス主義的な形態」、ないし「別の形態で民主主義が出現すること」の希望を失うことなく、ポランニーは自らの思想形成に取り組んでいく(ポランニー 2012, 若森 2011)。

その際、ハンガリー時代には距離をとっていたマルクスについて、ポランニーは、『資本論』第1巻第1章「商品」の物象化論をてがかりに、自らの社会哲学の核心となる人間の自由について集中的に研究した。ポランニーは、ウィーンでの宗教的社会主義者の研究会で、ハンガリー時代に出会ったマルクス主義とは異なる、新しい『資本論』の読み方をする機会を得ることになった。彼は、人間の諸関係、および人間と自然の諸関係が「透明で」あるような社会主義的モデルを求めて、マルクスの『資本論』第1巻を読み直した。ポランニーは、人間が生み出した意図せざる結果としての社会の客観的存在による人間の疎外という問題を、自由と民主主義の新たな問題として考察するようになる。同時に、キリスト教左派のグループとの交流を介して、独自のキリスト教徒としての内的な自覚、および現実の世界におけるキリスト教徒の使命についての認識を深めていくようになる。

ポランニーのウィーンでの亡命生活の時代は、ちょうど社会民主主義政権からオーストリア・ファシズムにのみ込まれるまでの時期と重なっていた。アメリカ発の世界大恐慌は中欧諸国を激震させたが、彼がその衝撃を経験したのもウィーンであった。ファシズム抬頭の生き証人の

ひとりとして社会学者ポランニーは、第一次世界大戦後いっそう混迷を増す 20 世紀の経済的・政治的・精神的・社会的危機、および危機がもたらす破局と、その破局の先にある人間の自由の危機について考察を深めていく⁹⁾。そうしたなかで彼は、「社会的存在としての人間」の根源的な危機が生じているという、「宗教的社会主義者」としての自覚を強め、決定論的なマルクス主義に基づく社会主義者と距離を置き、オーストリア宗教的社会主義者連盟（1927 年設立）に属して、宗教的社会主義者との交流から多くの影響を受けるようになる。マルクス主義の社会認識への批判は、1930 年代にオーストリアからイギリスに亡命したキリスト教社会主義者たちの勉強会で発表した草稿においても、述べられている。

「マルクス主義的社会主義はいつでも暗黙のうちに、社会が完全でありうると想定している。そのような想定は、国家や社会はその性質ゆえに不完全であるとするキリスト教徒にとって無縁である。共同体は社会を超える。いかなる社会も共同体の実現ではありえないのは、人間が邪悪だからではなく、社会が必然的に不完全であるからだ。権力や価値は社会に内在している。人間のいかなる形態の協働も、政治的・経済的な強制によって特徴づけられている」（ポランニー 2012b/1937:132）。

ポランニーによれば、キリスト教徒にとっては極めて重要な、人間の自由と規範的次元における共同体という次元が、マルクス主義には欠落している。いかなる人間の協働にもどのような社会主義的社会においても政治的・経済的な強制が避けられない、という認識がマルクス主義には欠けている。この点ではマルクス主義も、自由な市場経済によって強制や権力のない自由社会が完成していくと想定する、経済的自由主義と同じ問題を抱えている。このようなマルクス主義は、現代社会に蔓延するファシズムの本質やその精神的前提——とりわけそれが、人間の自由に対する真の脅威であるということ——の問題を理解することができない、とポランニーは見ていた。

ポランニーは、「ファシズムを一種の疑似宗教的な一種の政治的宗教」と把握する。そしてファシズムに抵抗するためには、民主主義がヨーロッパ文明の共通の遺産であるキリスト教を基盤とすることを確認して、宗教的社会主義者がファシズムとの闘争の正面に立たねばならない、と主張している。ポランニーによれば、ファシズムとはキリスト教の遺産である人間の自由と民主政治の否定に基づいた、究極の経済国家である。個人や協同組織は経済効率の点から必要なものだけに解体され、それ以外の諸要素は不純で不要なものとされる。ファシズムのような経済国家にとっては、自由も民主主義も「邪魔」なのである。ファシズムの社会主義への

9) ウィーン時代の実り多いポランニーの研究については、Kari Polanyi-Levitt, Cangiani, Thomas-berger による研究を参照。

攻撃や労働者運動への攻撃の意味を、ポランニーはこうに理解している。

だが、資本主義社会の教育や世論のなかでは、普通の人びとは経済システムに囚われていて、ファシズムについて正しく理解する機会も、現代の危機の本質を正しく把握する機会も、奪われている。人びとの民主主義への不信とファシズムへの支持は表裏一体である。赤いウィーンでは市民大学が活発で、労働者の教育が充実し、ウィーンの民主主義的な社会主義を労働者教育が支えていたが、ファシズムはこれらを攻撃した。民主主義を否定しキリスト教を攻撃するファシズムに、なぜ人びとは惹きつけられるようになったのだろうか。ポランニーによれば、決定的契機となったのは、ヴェルサイユ体制下の国際金融制度の混乱が巻き起こした世界恐慌、大量失業、通貨の破綻、そして暮らしの破壊であった。ファシズムは、世界同時的な現象であった。経済システムの破局と人びとの暮らしの荒廃と精神的な危機、そして民主主義の危機は結びついていたのである。

経済・政治・宗教的諸領域に分解されてバラバラにされ、互いの領域に引き裂かれて反目しあい、機能不全に陥った資本主義社会の世界的混乱のなかで抬頭したファシズムは、西洋の根源的価値を根源から否定している。ポランニーによれば、社会の再統合に関するファシズム的方法に立ち向かうことができるのは、キリスト教社会主義による経済の社会への再統合——透明で自由な領域を社会のなかで拡大していくこと——である。それは、不完全な社会をよりマシな社会へと向けていく不断の努力を行う使命である。

「資本主義社会では、経済システムは社会の残りの領域から切り離されて発展してきた。経済システムを社会に再吸収することは、社会のなかで共同体を完成させることに向けての一步なのである。自由主義は社会を、経済的領域、政治的領域、『宗教的』領域、その他の領域に分解してしまった。これらの領域を一つの全体に再統合することはわれわれの時代の使命である。それは経済システムを変えるというさらなる使命にむけて、われわれを後押しするものである」(ポランニー 2012c:123-124)¹⁰⁾。

10) ところで、キリスト教徒はもとより多くの同時代の人びとに衝撃的な影響を与えた、ローマ教皇ピオ 11 世による回勅『クアドラジェジモ・アンノ (社会秩序の再建)』が、1929 年の世界恐慌後の破壊的影響が続く渦中の 1931 年に公布された。そこでピオ 11 世は、当時の資本主義社会における所得分配を「少数の富者と数知れない無産者たちとの恐ろしい対照」と表現し、それが「重大な混乱」を招いている、と指摘した。そして、「共通善と社会的正義の要求に一致させるよう徹底的な是正」を、資本主義社会の目指すべき再建の方向として、強く勧告した。塩野谷祐一によれば、ポランニーと同時代のシュンペーターは、「管理された労働資本主義」でもマルクス主義的な社会主義でもない、実現可能で理想的な第三の方向として、ピオ 11 世が指し示す方向を位置づけていたという(塩野谷 1995:365-368)。オズヴァルド・フォン・ネル＝ブロイニング『カトリック教会の社会教説』本田純子ほか訳、山田経三監修、女子パウロ教会、1987 年、57 頁。

また、ウィーン時代のポランニーは、第一線の国際政治経済のジャーナリストとして『オーストリア・エコノミスト』誌の編集を担い、金本位制の再建に向けた通貨と財政政策の協調を確認する数々の国際会議、イギリスのゼネスト、イタリアやドイツのファシズム、アメリカのニュー・ディール、第二期ルーズベルト政権の憲法闘争、ケインズがブレインとなったイギリス自由党による政策綱領など、1920年代から30年代にかけての重要な国際動向を追い、分析した。ハンガリー出身のポランニーの透徹したまなざしは、英米などの列強諸国が自国の経済的利害のためにドイツのファシズムと融和外交を行ったことで、ファシズムの勢力拡大に加担しており、第二次世界大戦の勃発を防ぐ努力が不十分であった、と捉えた。

こうした同時代の世界情勢を踏まえて、ポランニーは社会科学者として、「自由主義的資本主義」（市場経済を基盤にした市場社会）と、それを唯一無二の機能する経済システムとして擁護する「経済的自由主義」にはファシズムを生み出した重要な責任の一端がある、という考えを鮮明にしていく。ポランニーから見れば、市場経済を一刻も早く危機から救済するためには、普通の人びとの暮らしが犠牲にされたり市民的自由が制限されたり民主政治が犠牲にされたりすることもやむなし、とする態度を、とりわけイギリス、アメリカ、ジュネーブの経済的自由主義者たちは表明した。そうしたなかで戦間期のアメリカで金融バブルが世界恐慌を引き起こし、欧州ではファシズムが跋扈するに至った¹¹⁾。

オーストリア・ファシズムにのみ込まれたウィーンで社会民主党による市政がクーデターによって崩壊する前年の1933年に、ポランニーは『オーストリア・エコノミスト』誌の編集の職を解かれて二度目の亡命を余儀なくされた。ポランニーに亡命先としてイギリスへのルートを可能にしたのは、ウィーンでのキリスト教左派のネットワークであった。

オーストリアからイギリス亡命後も、『オーストリア・エコノミスト』が廃刊に追い込まれる38年まで、世界経済の危機や列強諸国の動向、欧州諸国のファシズムの抬頭とファシズム的な憲法改正について分析し、寄稿し続けた。赤いウィーンの全盛期とオーストリア・ファシズムの抬頭によるその崩壊という自らの経験をもとに、渡英後も「社会主義への労働者運動が敗退してファシズムという大衆運動の情熱になぜとってかわられたのか」について根源的に問うたが、その問題意識は『大転換』の根底に流れている。

5. 『大転換』以降 —— オーウェンの社会主義から産業社会における良き生活へ

『大転換』の構想や材料は、1938年のイギリス滞在時にある程度出来上がっていたが、実際に『大転換』の草稿が執筆されたのは、アメリカのヴァーモントに留学した1941-43年である¹²⁾。

11) 若森 2015 の第4章を参照。

12) フレミングは、この時期の区分を、ヴァーモント時代と特別に設定するよう提案している（Fleming 2001）。

ブロックの指摘によれば、『大転換』には、マルクス主義的な要素と、マルクス主義から距離を置いた「埋め込み理論」とが混在している（Block 2001）。デールは、ポランニーの擬制商品論がテンニース経由でのマルクス継承（Tönnis [1921] *Karl Marx*）ではないか、という解釈を提示している。また、ポランニーにおけるキリスト教と社会主義の総合プロジェクトは『大転換』でも保持されているものの、前面には出ていない¹³⁾。

また、『大転換』でポランニーがその巻末の脚注にささやかに埋め込んでいる重要な命題は、欧州のファシズムによって消されてしまった「赤いウィーン」の再評価に関わっている¹⁴⁾。「赤いウィーン」について、とりわけ英語圏では、経済的自由主義者は正当な歴史的な評価を与えず、イギリスの社会経済史において社会政策の失敗の象徴として語られる「スピーナムランド」と同じ扱いがなされていることに対して、ポランニーは『大転換』第7章の巻末で執拗ともいえる反駁を試みている。

経済的自由主義は、社会政策や財政制度や通貨制度の在り方、そして民主主義や憲法の在り方までもが、市場経済と両立するように形づくられることを求める思想である。経済的自由主義は、人間の暮らしや生存の諸条件が整備されたり保証されたりすることよりも、市場経済の機能や規律が乱されないことを優先しようとする思考である。赤いウィーンも、イギリスのJ. M. ケインズやW. ベヴァリッジの修正された資本主義社会も、アメリカのニュー・ディールも、経済的自由主義者にとっては市場経済と両立しがたいものであり、否定すべき対象となっている。さらにF. ハイエクやL. ロビンズ、そしてW. リップマンといった経済的自由主義者たちは、「ファシズム≡集産主義≡社会主義」という図式を立ち上げて、「集産主義」の一種である「赤いウィーン」を「オーストリア・ファシズム」と同系列と見なす論理を構築した。これは、ポランニーのウィーンでの実体験と真実から乖離したものでしかなかった。彼の経験に照らせば、戦間期において英米列強は、個人の所有権に手をつけないかぎり、ファシズムには反対しなかった。むしろ、自由資本主義を掲げる英米の基本方針は、金融街の利害に抵触するような財政規律を乱す社会政策や財政改革——劣等処遇の原則に手をつけることで所有権のルールを変更したり、再分配や相互扶助の社会的絆の形成を促進したりする、たとえば赤いウィーンの試みや、イギリスの社会主義、あるいはイギリス自由党の経済改革（New Liberalism）、アメリカのニュー・ディール——に反対することだった。そして、ファシズムとの闘いを表明したのは、ナチス・ドイツが債務不履行を宣言してからである。

集産主義と社会主義はファシズムと同系であるという単純な主張は、第二次世界大戦の正当化の論理と相まって英米列強諸国の世論に浸透していったが、ポランニーは自らの経験に照ら

13) ビショップ（Bishop 1994）は、ポランニーの『大転換』にはキリスト教社会主義の理論的な要素がみられないと述べているが、その解釈は間違っている。

14) 『大転換』末尾の「第7章についての注解」には、「赤いウィーン」の社会主義、いわば先取りした福祉国家の民主主義的な実験について、詳しい言及がある。

して、「赤いウィーン」のような集産主義あるいは社会主義の正当性を主張しなければならなかった。これは、『大転換』の執筆意図の重要な部分を占めている。

『大転換』でポランニーは、社会主義者の課題——マルクス主義者の弱点や経済的自由主義者の命題や歴史解釈を乗り越えること——を提示している。社会主義者は、経済的自由主義者の集産主義批判を吸収して、再生しなければならない。経済的自由主義者が決してその正当性を認めない、社会的保護やポピュリズムが民主主義と結びつくことの重要性を、社会主義者は深く理解しなければならない。社会主義者は、世界大恐慌や金本位制の再建とその失敗、世界戦争、そしてニュー・ディールやケインズ＝ベヴァリッジの福祉国家といった時代の諸潮流について、経済的自由主義の解釈や説明に対抗する必要がある。

ポランニーは、社会転換の局面やファシズムの原因について、マルクス主義者も経済的自由主義者も正しく認識することができないことを、厳しく指摘している。それらは、「文明が崩壊し、また文明が転換期を経過しつつあるという歴史の決定的な段階を視野の内に捉えることができない」（ポランニー 2009:282）。ポランニーによれば、20 世紀に流布している「未熟な（crude）階級理論」によれば、市場と勢力圏を求める圧力は、単に一握りの金融業者の利潤動機によって生じたものであった。また、帝国主義は、大企業の利益のために政府をたぶらかして戦争をはじめさせようとする資本家の陰謀であると説明された。さらに戦争はそうした資本家に加えて、軍需産業によって引き起こされると考えられた。マルクス主義者は、19 世紀の保護主義は階級行動の結果であり、それは経済的利益に基礎づけられている、という議論をつくりあげていた点で、自由主義者と同様に「市場社会についての理解、さらにまた、市場社会における保護主義の全体的理解」の妨げになってきた（同上：276）。

『大転換』でポランニーが示す「社会主義」は、しばしば「オーウェンの社会主義」と表現されるように、非マルクス主義的社会主義である¹⁵⁾。『大転換』最終章でポランニーは、マルクスの社会主義像でもロシア革命から生まれた社会主義の経験でもなく、「福音書」で啓示された自由が産業社会にはそのまま適用できない現実を認識したオーウェンによる「社会の発見」に依拠して、「複雑な社会における自由」についての意識改革を論じている。『大転換』にはクエーカー教徒 J. ベラズによる貧困問題への取り組みやオーウェンの『新社会観』が登場するが、ポランニーは彼らの試みを、「ポスト・キリスト教の時代」において真にキリスト教の価値あるものを継承しようとする実践として、位置づけている。市場社会における「正統派のキリスト教」が「貧しい人びとの福音」であることを自由の名のもとにやめてしまったのとは

15) ブラヴォイは、ポランニーとグラムシの共通性について指摘する。「工場評議会もオーウェンの運動もその目標を実現できなかったが、社会主義の社会的ビジョンと新しい道徳的知的秩序を鼓舞した。資本主義の持続性を知っているグラムシとポランニーはこれらの具体的幻想の動員力に注目した。資本主義の不可避的な消滅を信じているマルクス主義者だけが工場評議会やオーウェン運動をユートピアと軽蔑することができるのである」（Burawoy 2003:207）。

対照的に、マイノリティーであるクエーカー教徒や「異端」の烙印を押されたオーウェンによる社会実践は、ポランニーの解釈によれば、産業社会で見捨てられた貧しい人びとのための新たな福音の方向性——キリスト教的社会主義——を先導していたのである。

現代産業社会におけるキリスト教社会主義——現代版のオーウェンの社会主義——は、民主主義の根源としてのキリスト教と、赤いウィーンの社会主義者のような政策転換の制度主義的側面とを、併せ持たねばならない。社会主義者は、寛容な社会や、市民的諸自由の義務と制度化に関心を持たなければならない。ポランニーのいう社会主義の生き活きとした源泉は、社会の自己防衛と民主主義の分かちがたい結びつきを再発見して政治と経済の民主化に向かう「制度転換」という課題と、その倫理的次元としての人間の自由の課題とに向き合うところから得られる。社会主義は、特別なエリートだけでなく、産業社会において万人が良く生きることを、20世紀の民主主義の課題として引き受ける思想なのである。

「社会主義は、本質的に、自己調整的市場を意識的に民主主義社会に従属させることによって自己調整的市場を超克しようとする、産業文明に内在する傾向のことである。[中略] また、共同体全体という観点からすると、社会主義とは、社会を諸人格間の独自の人間的な関係によって構築された組織としようとするこれまでの努力の継続にすぎず、西ヨーロッパにあっては、そのような努力はつねにキリスト教的伝統と結びつけられてきたものであった」(同上：418)。

経済的自由主義者たちは、経済制度にも政治制度にも社会政策にも、また人間の自由の意味にも経済自由主義的な定義を与えてきた。マルクス主義者たちは、20世紀前半の危機の本質を捉えきれなかっただけでなく、経済的自由主義者たちに対抗する思想軸を形成することができなかった。このような認識のうえに、ポランニーは独自の社会主義を定義したのである。

第二次世界大戦後のポランニーはハンガリーに戻ることを希望したが、かなわなかった。彼が職を見つけたのは、東西冷戦下の「赤狩り」旋風の吹き荒れるアメリカのコロンビア大学であった。アメリカのニュー・ディールを支えた人びとは現代の政治経済問題の表舞台から去って、研究・教育活動を行うことを余儀なくされていた。「社会における経済の位置とその変化」という北アメリカ時代のポランニーの研究プログラムは、晩年のポランニーの「人類学」、あるいは「経済社会学」への挑戦である。ポランニーによれば、人類学、あるいは経済社会学という学問領域は、古代から近・現代までの経済制度を年代順に並べるような年代記的方法では「時代遅れ」である。それらは、1920年代に夭折したヴェーバーの膨大な遺稿が示しているように、現代経済制度への批判的想像力の源泉となる宝庫である。

「ポランニーの観点からの『人類学的』性質は、単に、とりわけ古代・原始社会に関わる比

較分析への関心からもたらされているわけではない。ポランニーの方法そのものが、本質的に人類学的なのである。実際それは、『ホーリスティック』と形容しうる社会制度の歴史的認識を示している。彼にとっては何よりも、市場社会をはじめとする各社会組織を、歴史的観点から特殊なものとするような一般的特徴の考察が、重要なのである。経済は社会生活の位置側面であるが、ポランニーの研究は、全体における社会組織の研究を前提としている。『社会における経済の位置の変化を研究することは、それゆえ、さまざまな時代や場所でそのプロセスが制度化される方法を研究することに他ならない』。その社会においても経済は特殊な仕方では制度化されるのであり、こうして社会に占める経済の位置が明確になるのである。『位置』に注意を向けることは、このように社会の経済組織や、各文化が経済活動に与える意味を参照させることになる」(Cangiani et Maucourant 2008:19)。

コロンビア大学でのポランニーの挑戦は、市場社会や経済的自由主義に関するポスト『大転換』的な枠組みをつくることであり、その際に彼は、ヴェーバーやテンニースの経済社会学的な枠組みを再構築しようと試みた(Cangiani 2007, 若森 2011, Dale 2010)。デールによれば、コロンビア大学でのプロジェクトにも、ヴェーバーの先生であったテンニースの議論が活かされている(Dale 2010)。ポランニーの戦後の課題は、19世紀末から20世紀前半の欧州に現われた社会科学の創造性を、経済学を中心に再編されていくように見えた戦後の英語圏の社会科学の枠組みに、組み入れ再統合することだった。

「1890年代から20世紀のはじめにかけて社会科学の偉大な立役者たちは、資本主義やその特殊性、その起源、その発展についての解釈を打ち立てた。[中略]メインやテンニースやヴェーバーらの側にはデュルケームやパレートやゾンバルトの知的遺産が、マリノフスキーの側にはモースの知的遺産が登場する。現在知られているようなその後の展開に抗ってポランニーの思想が構築されたのは、まさにそのような社会科学の豊かな時期においてであった」(Cangiani et Maucourant 2008:19)。

「社会における経済の位置とその変化」という参照枠は、19世紀市場社会だけではない、さまざまな経済と政治の結びつきの諸形態や、経済と社会の連関の諸形態を提示することで、人間の社会変革の可能性や選択肢を創造することに貢献する。そのように最晩年のポランニーは確信していたのである。

20世紀の世界の苦難とともにある生涯を送ったポランニーの思想は、時代の生き証人としての彼自身の経験、そして世紀転換期のハンガリーで青年期を過ごした彼の世代(偉大な世代)が負った「使命(calling)」に対する「応答／責任(responsibility)」の飽くなく追究のなか

で形成されたものである。晩年のポランニーは、「この世界全体が工業・科学・経済という船に乗り込んだ以上、西洋には果たすべき責任がある」（ポランニー 2015b/1958：33）と主張し、「西洋が過去の行いに対して担うべき責任を創造的に果たしていくにはいかにすべきか」（同上），を問い続けた。

「西洋は、自分たちがすでに達成した物質的豊かさを必要としている新興諸国と、なぜ効率を競い合うのだろうか？なぜ西洋は、新しいより人間的な文化という良き生活を、効率に代わる目的として設定しないのだろうか？」（ポランニー 2012d/1958:309）。

おわりに

以上、本稿では、経済的自由主義に対抗するポランニー思想の核心にあるのが、彼独自のキリスト教理解と社会主義の定義である，ということを示した。K. ポランニー＝レヴィットやカンジャーニ，トマスベルガー，そしてデールといったポランニー研究者たちが明らかにしてきたように，イギリス時代にポランニーが英語で執筆した主著『大転換』の思想的源泉は，たしかにウィーン時代にある，といえる。ただし，経済的自由主義に対するだけでなく，マルクス主義に対する批判的見解も，ハンガリー，ウィーン，イギリス時代を通して深められ，その過程で独自の「社会主義」の核心となる思考が形成されたのである。

共産主義にもファシズムにも迫害されて亡命知識人として生きることになったその生涯において，ユダヤ系のルーツを持ちつつもキリスト教徒の社会主義者として生き，経済的自由主義の定義する自由や民主主義と格闘したポランニーを支える思想の核心部分に迫る研究として，イギリスのポランニー研究者のデールの近年の貢献——『カール・ポランニー——左派としての生涯』（2016）および，彼が編集したポランニーのハンガリー時代論集の英訳版（2016）——は，今後，いっそう大きな意味を持っていくだろう。

主要参考文献

- Bishop, J. (1994) "Karl Polanyi and Christian Socialism", in McRobbie eds., *Humanity, Society and Commitment: On Karl Polanyi*, Black Rose Books.
- Block, F. (2003) "Karl Polanyi and the Writing of *The Great Transformation*", *Theory and Society* (32).
- Burawoy, M. (2003) "For a Sociological Marxism; The Complementary Convergence of Antonio Gramsci and Karl Polanyi", *Politics & Society*, 31(2).
- Cangiani, M. (1994) "Prelude to *The Great Transformation*" in McRobbie ed., *Humanity, Society, and Commitment*, Black Rose Books.
- Cangiani, M. (2007) "The Forgotten Institutions", in Harvey M, Ramlogan R, and S. Randlesm eds. *Karl Polanyi*, Manchester University Press.

- Cangiani M. et J. Maucourant (2008) "Introduction", in Cangiani M. et J. Maucourant (eds.) *Essais de Karl Polanyi*, Éditions du Seuil.
- Congdon, L. (1976) "Karl Polanyi in Hungary, 1900–1919", *Journal of Contemporary History*, (11).
- Congdon, L. (1991) *Exile and Social Thought; Hungarian Intellectuals in Germany and Austria, 1919–1933*, Princeton University Press.
- Dale, G. (2010) *Karl Polanyi: The Limits of the Market*, Polity Press.
- Dale, G. (2016a) "Introduction" in Karl Polanyi (2016) *Karl Polanyi: The Hungarian Writings*, Manchester University Press.
- Dale, G. (2016b) *Karl Polanyi: A Life on the Left*, Columbia University Press.
- Dale, G. (2016c) *Reconstructing Karl Polanyi*, Pluto Press.
- Fleming, B. (2001) "Three Years in Vermont", A Paper read at the Eighth International Karl Polanyi Conference.
- Litván, G. (2006) *A Twentieth-Century Prophet: Oscar Jaszi 1875–1957*, Central European University Press.
- Nagy, E. J. (1994) "After Brotherhood's Golden Age", in McRobbie eds., *Humanity, Society and Commitment: On Karl Polanyi*, Black Rose.
- Polanyi, K. (2001/1944) *The Great Transformation: The Political and Economic Origins of our Time*, Boston: Beacon Press (野口建彦・栖原学吉訳『[新訳] 大転換』東洋経済新報社, 2009年).
- Polanyi, K. (2002;2003;2005) *Chronik der großen Transformation*, Band1–3, M. Cangiani, C. Thomasberger, und K. Polanyi–Levitt, Hrsg. Metropolis Verlag.
- Polanyi, K. (2016a/1918) "The Calling of Our Generation", in Polanyi, K. (2016)
- Polanyi, K. (2016b/1923) "The Resurrection of Jesus", in Polanyi, K. (2016).
- Polanyi, K. (2016) *Karl Polanyi: The Hungarian Writings*, edited by G. Dale (translated by Adam Fabry), Manchester University Press.
- Polanyi–Levitt, K. and M. Mendell (1987) "Karl Polanyi: His Life and Times", *Studies in Political Economy* (22), Spring.
- Thomasberger, C. (2005) "Human Freedom and 'the Reality of Society': Origins and Development of Karl Polanyi's Ideas during the Inter-war Period", 『経済学史研究』47(2).
- Thomasberger, C. (2012) *Das Neoliberale Credo*, Metropolis Verlag.
- カタンザリア, M. (2015) 「編者解説 2」, ポランニー, K. (2015)。
- 桑田学 (2014) 『経済的思考の転回』以文社。
- 小林純 (2010) 『ヴェーバー経済社会学への接近』日本経済評論社。
- 塩野谷祐一 (1995) 『シュンペーター的思考』東洋経済新報社。
- 福田邦夫 (2015) 「訳者解説 ポランニー思想のアクチュアリティー」, カール・ポランニー (2015)。
- ポランニー, K. (2009/1944) 『[新訳] 大転換』(野口建彦・栖原学 訳)、東洋経済新報社。
- ポランニー, K. (2003/1975) 『経済の文明史』(玉野井芳郎編訳・石井溥・長尾史郎・平野健一郎・木畑洋一・吉沢英成 訳), 筑摩書房。
- ポランニー, K. (2012) 『市場社会と人間の自由』(若森みどり・植村邦彦・若森章孝 編訳) 大月書店。
- ポランニー, K. (2012a/1927) 「自由について」, ポランニー, K. (2012)。
- ポランニー, K. (2012b/1932) 「フェイズムの精神的前提」, ポランニー, K. (2012)。
- ポランニー, K. (2012c/1937) 「共同体と社会——われわれの社会秩序のキリスト教批判」, ポランニー, K. (2012)。
- ポランニー, K. (2012d/1958) 「アリストテレスの豊かな社会論」, ポランニー, K. (2012)。
- ポランニー, K. (2015) 『経済と自由』(ジョルジオ・レスタ, マリアヴィット・カタンザリティ編, 福田

邦夫, 池田昭光, 東風谷太一, 佐久間寛 訳), 筑摩書房。

ポランニー, K. (2015a/1919) 「今、何を求められているか」, ポランニー, K. (2015)。

ポランニー, K. (2015b/1958) 「新しい西洋のために」, ポランニー, K. (2015)。

ポランニー＝レヴィット, K. (2015/2013) 「序文」, カール・ポランニー(2015)。

レスタ, J. (2015) 「編者解説 1」, ポランニー, K. (2015)。

若森みどり(2011)『カール・ポランニー』NTT 出版。

若森みどり(2015)『カール・ポランニーの経済学入門』平凡社。